

「よみがえれ！新浦安駅前『公共広場』大作戦」に対する市民・子ども・教師の評価 - 市民まちづくり活動と学校教育との連携に関する研究 (3) - 正会員○細田祥子* 佐久間康富****

同 小林 裕** 土久菜穂*****

同 梶島邦江*** 横堀 肇*****

キーワード：市民まちづくり活動、学校教育、評価

1. はじめに

前々報、前報では、「よみがえれ！新浦安駅前『公共広場』大作戦」(以下、「大作戦」)の背景と目的、方法を述べた。本報では「大作戦」の参加者である、一般市民、子ども(注1)、教師の三者の評価を取りあげ、それぞれの主体から見た「大作戦」の成果と課題を明示する。さらに、以上を踏まえ、市民まちづくり活動と学校教育の連携における今後の課題をまとめる。

2. 市民の評価

2-1. ワークショップアンケート

参加者にワークショップに関する五段階評価アンケート(注2)を実施した。その結果を図1に示す。全ての質問に対し

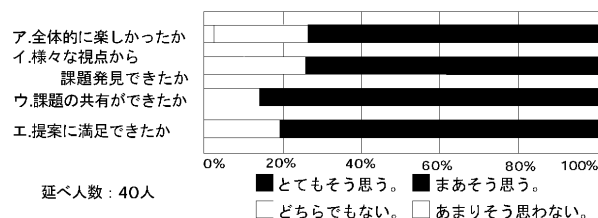


図1. ワークショップアンケート結果

表1. 展示会場でのアンケート結果 (抜粋)

展示作品に関する回答	
・	いろいろなアイデアに触れ、是非、具体的に実現することを希望する。
・	一般の方の作品と並んで展示されているのを見て、小学生もなかなかやるなと感心した。
・	高ポイントをえている恐竜のいるプランは、大変おもしろいけど、モノレールを走らせるお金はどこから出るのだろうか？ 一般の常識的なプランも、全く予算が示されていない。
・	駅周辺には、自転車が毎日あふれているので、現実的には難しいと思う。
・	大部分のパネルにおいて理想論におわらなかつたところがよかった。優秀作については強く浦安市に提言してほしいと思う。
・	斬新な意見で、とても現実的ではないけれど、みんなが考えてくれたことがかなうと、嬉しいことだ。
・	駅前広場でのイベントについて、コンサート、歌声コンテスト、週末の音楽など、近隣に騒音の迷惑がかかることを考えてほしい。
自転車問題に関する回答	
・	撤去している側から、自転車を置いて紙がはられようが平気である。
・	駅前の地下がすべて駐車場になっても違法駐輪はあるだろう。
・	駅前、駅前以外の場所でも放置自転車の多いこと、危険なことなどは口頃から不満だ。
・	自転車の多いのは悪いことではない。とめ方、マナーの問題だ。
・	行政と市民がもっと協力し合わなければ、いくら考えてもムダだ。
・	自転車を他の人に迷惑にならずにとめられる所をきちんと確保してほしい。
・	長く止めるときは、キチンと有料駐輪場におくべきだと思うが、お買い物の入用に、無料できちんと止めるところを作って欲しい。
・	市/MONAの連係で不法駐輪を減らすべきだと思う。
・	駐輪場について、不便なところを作って利用しないと思う。
・	固定式の自転車置き場を広場においておくだけで、放置自転車は減る。
・	「放置」が見苦しいのであれば、「設置」できる場所を使い易いところにつくるべきだ。
・	各自転車に発信器を取り付ければ、規定の駐輪場におかない人を、罰することもできる。
子どもに関する回答	
・	住みよいまちづくり、環境問題を真正面に取り組んでいる学生に感動した。
・	子どもを育てている今、違法な駐輪などをしない人間に育てるのが、まず第一歩で、その上で、このようなまちづくり広場があればとてもよいと思う。

て五段階中最下位の評価はなく、80%近い人がワークショップを楽しみ、まちに関して新たな課題を発見できたと回答している。また、他の参加者と議論するなかでまちの課題を共有することができ、提案の満足度も高く評価されている。

2-2. 展示会場でのアンケート

ワークショップ終了後、市民と子どもの作品の展示会場にて来場者にアンケート調査(注3)を行った。自転車問題そのものについての回答が多く、今回参加しなかった市民にとっても関心の高い展示であることがわかる。しかし展示作品に関して高く評価するものの、その実現性の低さを指摘するものが目立つ。また、こうした活動を通して子どもを教育していくことの必要性が言われている。

3. 子どもの評価

教師が授業時間を利用して、子どもに対して、「大作戦」やそれと連携した授業に関する調査を行った。今回の活動を通して子どもに見られた成果を以下に述べる。

3-1. 小学生の評価

江黒(注4)は、小学生に対してアンケート調査(注5)を行い、大人の市民との関係について認識の変化を見ている。その調査結果によれば、子どもの中に「市民と対等な立場である」という意識の構築がなされ、これは『『大作戦』を通して普段触れ合うことの少ない市民と関わり、意見交換が可能であったことに加え、自らの提案に対して市民から高い評価を得たことによる」と指摘されている。また、地域の課題を相互の接点として関わる中で、市民とは「同じ問題を抱える仲間」という意識が子どもの中に芽生えたとも述べている。

表2. 小学生の認識の変化

	「大作戦」前	「大作戦」後	増減
市民が一番上	7	6	-1
子どもが一番上	1	5	+4
市民が一番下	7	10	+3
子どもが一番下	31	8	-23
市民と子どもが同じレベル	10	27	+17

カッコ内は小学生の人数を表す。全人数は34人。

- ・このワークショップを通して駐輪問題に対して興味が出た。
- ・地域が今のような状況か、考え直されるいい機会だった。
- ・調べていく中で、自分から考え意見していくことができ、関心が高まった。
- ・身近な地域の公共を知ることができ、楽しかった。
- ・自分たちの街を発展させるために努力したので、いい体験になった。
- ・地域の人全体で考えていくことの重要性がわかった。
- ・新浦安の駐輪やゴミの問題に対して意識が高くなった。
- ・大人たちの前で発表し、緊張したがやりがいを感じた。
- ・私たちの提案が実行されていけば、取り組んだかいがある。
- ・これをきっかけに他の問題にも自分からいろいろと取り組み、家族などにも考えてもらうように呼びかけようと思った。

図2. 中学生の「大作戦」に対する感想 (抜粋)

An evaluation of "Yomigaere! Shin-urayasu ekimae 'Kohkyo-Hiroba' Daisakusen" project by the public, children and the teachers.
~A study on the interrelation between school education and town and community planning.(1)~

3-2.中学生の評価

「大作戦」後、村田^(注6)が、自由回答により中学生の「大作戦」に対する感想を得た^(注7)。結果を表3に示す。中学生は、地域の身近な課題に触れ、また市民と共に活動する中で、地域に対する新たな発見や地域の課題に対する関心が生まれ、自らの意識が変化したことを自覚していることなどが読みとれる。

4. 教師の評価

教師へのヒアリング調査^(注8)から、教師の視点から見た「大作戦」と連携した学校教育の成果と課題を得た。

まず、「大作戦」と連携することにより、授業を通して、地域で実際に起きている問題を扱うことができ、さらに子どもと教師だけでなく市民とともに学習できるという点で、学校の中のみでは学習し得ない事柄を多く学ばせることができると評価している。また、子どもの学習成果に対して通常の授業と違い、教師からだけでなく、市民からも評価が行われ、子どもにとって学習の励みになった点が成果として挙げられる。

一方で、スケジュール調整の難しさが課題として挙げられている。学校全体の時間割を優先する必要がある、臨機応変に「大作戦」への参加を進めることが困難であった。今後は、選択教科や総合学習の時間でも取り扱い、その上で授業時間数やどの時期に行うかを考えていく必要があるとしている。

5. 今後の課題

以上の課題を踏まえ、市民まちづくり活動と学校教育の連携における今後の課題とそれに向けた方策を述べる。

5-1.提案の実現性

2-2.において、市民から、財政面や多様な主体が関わる問題の困難さから、提案の実現性の低さが指摘された。これに対しては、提案のいくつかに関して社会実験の形で一定期間、実際に試行することが考えられる。社会実験によって提案の問題点と実現に向けた方策を具体的に得られると考えられる。自転車問題などの生活に密着し、かつ市民間で意見が対立するような問題に対しては、社会実験によるあらかじめの成果イメージの共有が不可欠であり、その上で、市民に選択をゆだねることが必要である。また、この「大作戦」は行政との関わりをほとんど持たずに行われたが、市民の提案に対して行政も興味を示しており、提案を実現していくために、行政との協働関係を作り上げていく必要がある。

5-2.市民と子ども、教師のスケジュールの調整

このワークショップは全4回とも土曜日の午前中に行われた。これは、学校との連携からやむを得ないことであったが、市民が継続して参加することが難しく参加者を限定してしまったことにつながった。また、子どもは授業時間を使って参加するため、ワークショップの前半のみの参加

に限られてしまうという問題点があった。

今回は、各週の土曜日を市民と子ども、教師との接点としてワークショップを行うことができたが、平成14年度以降は、週休二日制が完全実施されることで、正規の授業時間を使ったまちづくり活動との連携はさらに困難になっていくと考えられる。

5-3.市民と学校のインターフェースの必要性

「大作戦」では、学校の教師であり、かつサーカス団のメンバーでもある、学校、サーカス団と市民の間で様々な調整を行う人材に恵まれ、市民まちづくり活動と学校教育の連携が実現したと言っても過言ではない。しかし、今後、継続的に特定の人物がインターフェースとして存在することは期待できない。

この課題への対処として、「まちづくり学習センター」の設立が具体案として挙げられる。これはまちづくり学習の総合性を考えたときに多様な主体の間に立って調整する仕組みと場である。

学校の週休二日制に関する課題点に対しても、子どもの社会教育の受け皿としての役割が期待できる。また、今回授業の一環として「大作戦」に取り組み、大きな成果があった。平成14年度から本格的に総合学習が始まることもあり、今後もまちづくり学習に取り組む学校も増えると思われる。「まちづくり学習センター」は、その際の支援体制、機関、制度としての有効性も期待できる。

謝辞

本編執筆にあたり、江黒友美様、村田清光様に多大なお力添えを頂きました。お二人に大変感謝するとともに、益々のご発展をお祈りします。

<注釈>

- (注1)「子ども」とは、M小学校の第六学年生34人と、I中学校の第三学年生の内、「選択社会科」を選択した21人を示す。
 (注2) 2001年6月30日の第一回、7月28日の第二回、9月29日の第三回、10月20日の第四回ワークショップ終了後に行った。
 (注3) 展示会は、2001年11月1日から7日まで、モナ新浦安店の一階アトリウムにて行なった。会期中、来場者に書き置きによる自由回答でのアンケート調査を行い、全回答人数は40人であった。
 (注4)「大作戦」に関わって、教育学の視点から調査研究を行い、下記の文献を執筆している。
 (注5) 2001年11月26日に「ワークショップの前と後の、行政（市役所など）と、大人の市民とあなた達の力の関係を図で表してください。」との設問に対して構造図を描かせた。行政については、本編では扱わないため、割愛した。
 (注6) サーカス団のメンバーであり、かつI中学校の教員である。
 (注7) 2001年11月の授業中に自由回答の記入が行われた。
 (注8) 2001年12月5日が実施した。

<参考文献>

「地域との連携を図る『まちづくり学習』に関する研究」江黒友美 千葉大学大学院教育学研究科修士論文 2002年3月

* 早稲田大学大学院修士課程
 ** まちづくりプランナー

*** 埼玉大学教授、博士（工学）

**** 早稲田大学大学院理工学研究科 博士後期課程・工修

***** 千葉県浦安市役所 修士（工学）

***** 都市基盤整備公団 総合研究所・工学博士

Graduate School, Dept. of Architecture, School of Sci. and Eng., Waseda Univ.

Town and community planner

Prof. of Saitama Univ. D.Eng

Doctor Course, Dept. of Architecture, Graduate School of Science and Eng., Waseda Univ., M. Eng.

Urayasu Municipal Office, M. Eng.

UDC Research Institute, Urban Development Corporation (UDC)